



TITLE:

京大広報 No. 573

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 573. 京大広報 2002, 573: 1345-1358

ISSUE DATE:

2002-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196531>

RIGHT:



京大広報

No. 573

2002. 11

目次

大学の動き

平成14年度「21世紀 COE プログラム」の

採択結果.....1346

京都大学における全学共通教育の改革.....1347

「第3回京都大学国際シンポジウム」の

報告.....1348

博士学位授与式.....1349

部局の動き

経済学研究科に寄附講座を設置.....1349

寸言

大学と云う階段 千代賢治.....1350

随想

総合人間学部草創の頃

名誉教授 児嶋眞平.....1351

洛書

巫女の視点と社会学者の視点 大澤真幸.....1352

訃報1354

日誌1355

話題

木質科学研究所が

インドネシアでシンポジウムを開催.....1355

エネルギー科学研究科・エネルギー理工学

研究所「産学連携シンポジウム」を開催...1356

宇治キャンパス公開2002を開催.....1357

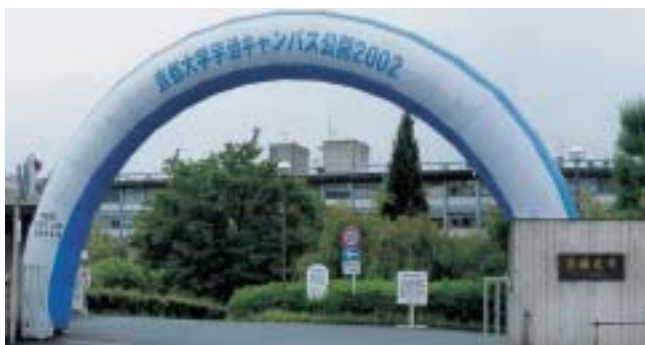
お知らせ

第5回情報学シンポジウム

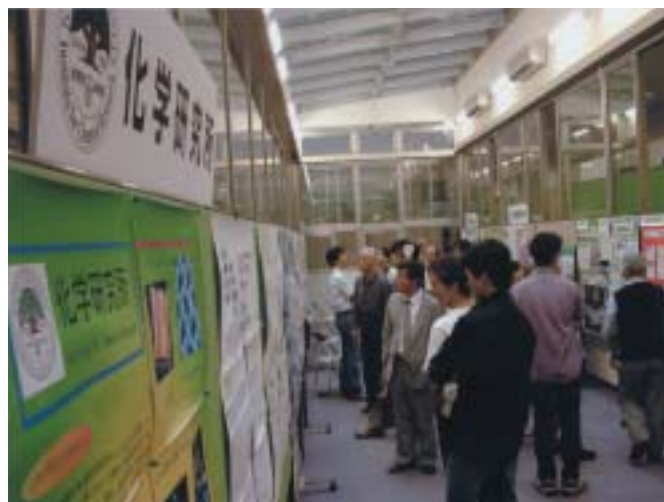
情報社会の基盤を拓くソフトウェア研究...1357

能楽鑑賞会.....1358

編集後記1358



宇治キャンパス公開2002を開催
- 関連記事 本文1357ページ -



京都大学広報委員会

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

大学の動き

平成14年度「21世紀COEプログラム」の採択結果

「21世紀COEプログラム」は、文部科学省が、世界最高水準の研究教育拠点を形成し、研究水準の向上と世界をリードする創造的な人材育成を図ることを目的として平成14年度から新たに始めた事業である。

京都大学では、平成14年度に募集のあった5分野に対して、各部局から計画を提案してもらい、計画の概要等を聞くためのヒアリングを実施するなどのプロセスを経て、本事業の趣旨に適した5分野、15件の拠点形成計画を文部科学省へ申請した。

今回、日本学術振興会を中心に運営されている「21世紀COEプログラム委員会」において、各拠点の申請内容に係る研究教育活動のこれまでの実績

や拠点を形成するための構想・計画等が、提出書類及びヒアリングによって審査され、京都大学の申請のうち5分野、11件の拠点形成計画が採択された。

本年度に5分野で採択された全件数は、50大学113件となっており、分野別の内訳は、「生命科学」分野 23大学28件、「化学・材料科学」分野 15大学21件、「情報・電気・電子」分野 17大学20件、「人文科学」分野 16大学20件、「学際・複合・新領域」分野 22大学24件となっている。

なお、本事業は、平成15年度においても、新たに5分野で募集が行われるが、本年度と同様のプロセスで、各部局に提案を求め、その中から、大学として選りすぐって文部科学省に申請する予定である。

平成14年度「21世紀COEプログラム」の分野別採択一覧

分 野	分 科 名	申請部局	プログラム名称	拠点リーダー
生命科学	バイオサイエンス	生命科学研究科 ウイルス研究所	先端生命科学領域の融合的相互作用による拠点形成	生命科学研究科 教授 柳田 充弘
	生物学	理学研究科 生態学研究センター 霊長類研究所	生物多様性研究の統合ための拠点形成	理学研究科 教授 西田 利貞
化学・材料科学	化学	理学研究科 工学研究科 化学研究所	京都大学化学連携研究教育拠点	理学研究科 教授 齋藤 軍治
	材料科学	工学研究科	学域統合による新材料科学の研究拠点	工学研究科 教授 小久見善八
情報・電気・電子	情報科学	情報学研究科 学術情報メディアセンター	知識社会基盤構築のための情報学拠点形成	情報学研究科 教授 上林 弥彦
	情報科学，電気通信工学	情報学研究科 工学研究科	電気電子基盤技術の研究教育拠点形成	工学研究科 教授 荒木 光彦
人文科学	文学，史学，哲学	文学研究科	グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成	文学研究科 教授 紀平 英作
	心理学	連合構想	心の働きの総合的研究教育拠点	文学研究科 教授 藤田 和生
学 際・複 合・新領域	地域研究	アジア・アフリカ地域研究研究科 東南アジア研究センター	世界を先導する総合的地域研究拠点の形成	アジア・アフリカ地域研究研究科 教授 加藤 剛
	エネルギー科学	エネルギー科学研究科 エネルギー理工学研究所 宇宙電波科学研究センター	環境調和型のエネルギーの研究教育拠点形成	エネルギー科学研究科 教授 笠原三紀夫
	災害科学	防災研究所	災害学理の究明と防災学の構築	防災研究所 教授 河田 恵昭

平成14年度に募集が行われた分野

「生命科学」，「化学・材料科学」，「情報・電気・電子」，「人文科学」，「学際・複合・新領域」

平成15年度に募集が予定されている分野

「医学系」，「数学・物理学・地球科学」，「機械・土木・建築・その他工学」，「社会科学」，「学際・複合・新領域」

京都大学における全学共通教育の改革

改革の必要性

本学の教養教育を担う体制としては、平成5年度以来、教育課程委員会を中心とした全学的な運営体制を採るとともに、総合人間学部が全学共通教育の実施責任部局として中心的な役割を果たしてきた。実施責任部局を擁していることは、授業担当教員の教育への責任感や改善への熱意を維持していく上で極めて重要な意義を持っている。しかし、教育の改善について全学的観点からの企画、実施及びその評価を系統的に進めていく上で、運営体制と実施責任部局の権限の整理に不明確な点があり、必ずしも十分な体制ではなかった。このため、平成12年度より京都大学将来構想検討委員会を中心に本学の教養教育実施・運営体制の改善について検討が行われ、平成15年度より実施する新しい体制「高等教育研究開発推進機構」について成案を得、現在その準備が進められている。

高等教育研究開発推進機構の設置構想

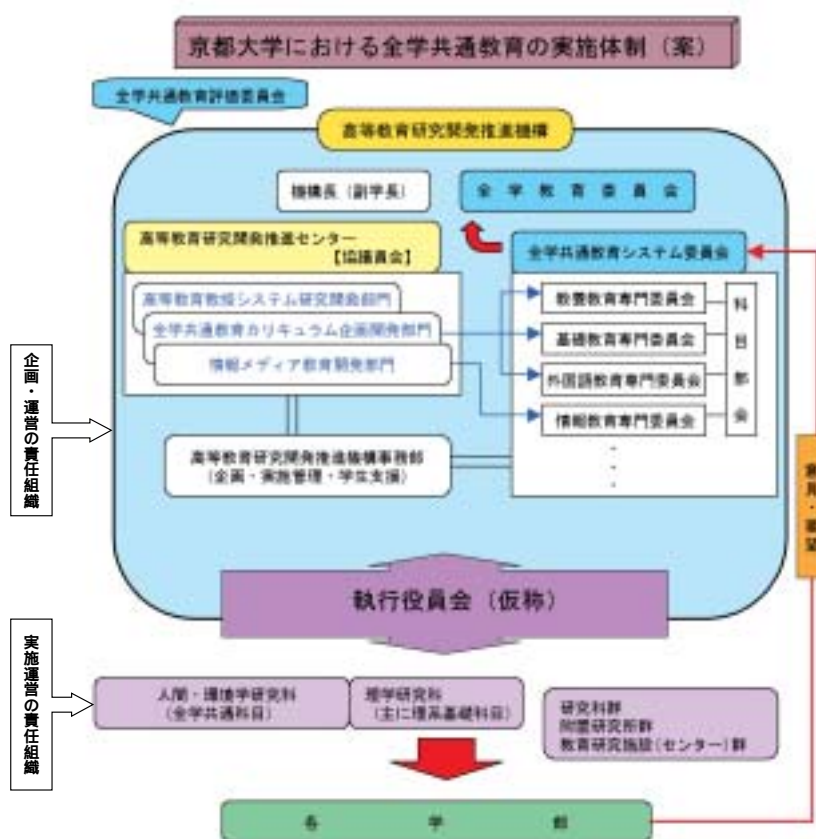
この新しい「機構」は、副学長クラスを機構長として全学的な諸委員会による運営を統括するとともに、新たに専任教官を配置した「高等教育研究開発推進センター」を併設する。「センター」は、これまでの「高等教育教授システム開発センター」を発展的に改組し研究部門とするとともに、これに加えて、「全学共通教育カリキュラム企画開発部門」、「情報メディア教育開発部門」を設置する。特に前者の専任教官は実施責任部局との連携を重視し、「機構」における運営と実施を日常的に結びつけるリエゾン機能を果たすことを任務としている。また機構長、実施責任部局代表者、センター専任教官等によって「執行役員会」を構成し、教育の改善・実施・評価の全般にわたって執行責任を持つ体制を構築する。これまで「高等教育教授システム開発センター」が進めてきた教育方法、教授法、授業開発、教育評価

等に関する研究を、本学における教養教育の実際に結びつけた改善を具体化していく構想である。また、機構に対してその活動状況を点検・評価し、必要な助言・勧告を行う「全学共通教育評価委員会」を、学外委員を含めて設置する予定である。

なお、現在、事務局学生部、総合人間学部に分かれている全学共通教育に関する事務部門を統合・一元化し、本機構を支えることとする。

このような新しい構想により、本学の教養教育の良き伝統を維持するとともに、時代の要請に応えた活力ある教育の場を構築していく。

(高等教育研究開発推進機構設置準備室)



「第3回京都大学国際シンポジウム」の報告

京都大学国際シンポジウムは、京都大学の学術研究を世界に向けて発信する事を目的に海外で開催することを前提として、平成12年度から開催されてきた。また、学会発表より幅の広い包括的な内容を持ち、複数部局が協力して京都大学をアピールすることを目指している。

第1回は、情報学研究科が中心となり「ネットワークとメディアコンピューティング」と題し、平成13年1月に米国カリフォルニア州サンタクララにおいて開催された。第2回は、同年11月に経済学研究科と経済研究所を中心に「新世紀に直面する日本経済の変貌」と題し、英国ロンドン大学及びエジンバラ大学において開催された。

第3回目当たる今回のシンポジウムは、本年度より公募方式にて学内に呼びかけられたもので、エネルギー科学研究科から提案された「21世紀のポスト化石エネルギー - バイオマスエネルギーの将来 - 」をテーマに同研究科の坂 志朗教授を実行委員長として、9月3・4日の2日間、カナダのモントリオールにおいて開催された。京都大学からは、西本清一総長補佐、エネルギー科学研究科、工学研究科、農学研究科、経済研究所、木質科学研究所ならびに国際融合創造センターの各教官らが参加した。

はじめに、西本総長補佐により「21世紀における

京都大学の主張」と題する基調講演があり、京都大学が目指す21世紀像が紹介された。続いて、1) 環境問題の現状と将来予測、2) バイオマス燃料及びケミカルス源としての可能性の2課題に分けて講演ならびにポスター・プレゼンテーションが行われた。講演では、京都大学の教官による11件の発表と海外からの講演者による6件(カナダ3件、アメリカ合衆国2件、英国1件)の計17件の発表があった。また、ポスター・プレゼンテーションでも35件の発表があり、学内33名(うち院生11名)を含む計148名の参加者によって活発な意見交換が繰り広げられた。今回初めて企画したポスター・プレゼンテーションは、若い学生の海外での交流の場としても有意義であった。

北米は欧州とともにバイオマスエネルギー研究が盛んな地域であり、基礎から実証プラントレベルの多くの研究がなされ、世界に先駆けてバイオマスエネルギーの利用を推進している。このような背景から、カナダとアメリカ合衆国の国境に近いモントリオールは、バイオマスエネルギー関連の研究情報交換および研究者の交流の場として最適であった。

本シンポジウムのキーワードは「バイオマスエネルギー」であるが、シンポジウム準備段階でテーマに対して多くの意見が出た。その一つは、バイオマスエネルギーではテーマが狭すぎるとの指摘であり、「再生可能エネルギーの将来」など副題についても検討した。しかしながら、風力、水力、地熱、バイオマス等多岐に渡る再生可能エネルギーでは内容が散漫になると考えられ、バイオマスエネルギーに焦点を絞り、その周辺領域をできるだけ広く取り込んだ形で計画した。

タイミングよく、シンポジウム初日にはカナダが京都議定書に批准したとの報道が北米各地に流れ、「Kyoto Protocol」発行の地である京都からの世界への情報発信にバイオマスエネルギーがまさにふさわしいものとなり、シンポジウムは成功裏に終了した。関係各位に改めてお礼を申し上げたい。

(国際交流委員会)



博士学位授与式

9月25日（水）午前10時30分から，京大会館において，長尾 真総長，両副学長をはじめ，各研究科長，学舎長出席のもと，博士学位授与式が挙行された。

総長から，各授与者に対し学位記（7月23日付，9月24日付）が手渡された後，総長の式辞があり，午前11時30分終了した。

各研究科別内訳は次のとおりである。

研 究 科	平成14年 7 月			平成14年 9 月		
	課程 博士	論文 博士	計	課程 博士	論文 博士	計
文 学 研 究 科	6	1	7			
教 育 学 研 究 科						
法 学 研 究 科		2	2			
経 済 学 研 究 科	7	4	11	2	2	4
理 学 研 究 科	5	1	6	3	1	4
医 学 研 究 科	7	3	10	3		3
薬 学 研 究 科	1	3	4		4	4
工 学 研 究 科	6	9	15	8	6	14
農 学 研 究 科	4	8	12	4		4
人間・環境学研究科	1	1	2	5		5
エネルギー科学研究科				1		1
情 報 学 研 究 科		2	2	3	1	4
計	37	34	71	29	14	43

部局の動き

経済学研究科に寄附講座を設置

10月1日，大学院経済学研究科の寄附講座「金融・証券システム（大和証券グループ）講座」が設置されることになった。

概要は次のとおりである。

- 1 部 局 名 経済学研究科
- 2 名 称 金融・証券システム（大和証券グループ）講座
- 3 寄 附 者 株式会社大和証券グループ本社
取締役社長 原 良 也
- 4 寄 附 金 額 総額150,000,000円（分割納付）
- 5 設 置 期 間 平成14年10月～平成17年 9 月
（3年間）
- 6 担 当 教 員
教授相当 大 西 匡 光
助教授相当 乾 孝 治

7 研究目的

高度なファイナンス工学の研究と，その実務への応用を促進すること。

8 研究内容

非完備市場における資産の価格評価メカニズムを明らかにするとともに，それに基づく資産運用と資産管理の開発を目指す。

9 研究課題

- （1）多期間あるいは連続時間における均衡価格を導出する。
- （2）資産価値の評価式を導出し，比較静学等を行うことによって評価式の定性的な経済学的特性の考察を試みる。
- （3）個別資産の価格評価とそれに基づくポートフォリオ運用手法，リスク・ヘッジ手法の開発を行う。

寸言

大学と云う階段

千代 賢治



私は中国山脈の草深い田舎に誕生した。一学年男女合わせて五十人に満たない小学校で学んだ。裸足で通学する生徒が半ばを越していた。次いで地方小都市の旧制中学校（五年制）に進み其処では上級生にお辞儀をする規律等を教えられた。あまり勉強しなかったが幸いに、地方都市に在る旧制高等学校文科（三年制）に入った。此処では全国各地から集まったクラスの仲間に依って刺激され一気に世界が広がった。当時の風潮からいくらかはマルクス・ボーイ的になり、侃々諤々の議論を続け乍ら私の中に実存主義的な京都学派的底流が静かに流れ込んだ。

大学に進み入学早々の選考にパスして大学の寄宿舎に入った。全国の旧制高校の卒業生と寝食を共にし乍ら、各学部での学習の内容を聞いて知的好奇心を燃やした。時には当時学生課長だった天野貞祐さんが、談話室の文字通りの爐辺を囲んでの寄宿舎生とのやり取りに参加して戴いた。

其の他大学側が用意して呉れたであろう記憶に残る行事を挙げてみたい。

須田国太郎さんは文学部の講師だったと思うが学友会館でセザンヌの連続6回に亙る講義をされた。

源 豊宗さんは同様文学部の講師だったが毎年のように「古寺巡礼」に同行して戴いた。考証等はあまりされないで私達の一人として鑑賞される姿勢が印象的だった。弘文堂刊行の先生が編纂人の一人である日本美術図譜は後年私の戦旅の必携図書だった。

目先が変わったのでは学生集会所の階上であった、当時文楽を代表する古靱太夫と鶴沢清六（三味線）の素語りであった。百匁蠟燭二本を立てた仮設舞台の上での熱演だった。

其の他数々の感性に訴える美的なものへの目覚めを促し、それを涵養するチャンスを大学の生活は与えて呉れた。

学問の方では特に最終年次の三回生では文学部の

講義を聞く事が多かった。中でも田辺 元さんの特別講義は天野貞祐さんを初めお歴々の教授が教室の最後列でノートをとられていた。小柄な和服姿の瘦身の先生はノート類は一切無く、時にチョークだけを持って教壇を左右に動かれる、講義の内容が整然としていて一冊の書物の如き観を呈する迫力のあるものだった。友人の一人が許されて先生の御宅での面会日のメンバーになり、彼から聞いたところでは、講義をされる内容をすべて原稿に書かれ、それを推敲した上で講義に臨まれるとの事だった。

法学部の講義は人並みに聞いたが知識が主体のようで、私の不勉強の故だと思っているが情熱が今一つ湧かなかった覚えがある。ただ法体系毎に夫々論理構成の一貫している処は実社会での応用面で大いに役立った覚えがある。

卒業年の半ばに理論だけで無く実践をと云う事で、実践の一つとして茶道の研修を寄宿舎の仲間呼び掛けた。贅沢にも指導を久松真一先生に御願い出来ることになった。幸いに裏千家から許されて利休庵での正座から始まった。先生は主導的に一本の線香を立てられ一緒に正座戴いて、比類の無い禅者であった先生の迫力を身近に感じた。

年を経て今感ずる事は、大学時代は得難い人との出会いがあり、それに依って今の自分が在ると云う事である。今の青少年は如才無く一応誰とでも交際するが、まさかの場合自分に頼るものが無いと聞く。他との出会いを発見し自分を生かすには、須く自分をさらけ出し裸になる事が大切だろう。

此処で思い出すのは鎌倉時代末期の大燈国師と花園天皇の問答語である。

億劫相別れて須臾も離れず

尽日相對して刹那も對せず

此理人々之有り

如何なるか是恁麼之理

（ちしろ けんぢ 住友生命保険(株)元社長 昭和16年法学部卒）

随想

総合人間学部草創の頃

名誉教授 児嶋 眞平

平成4年10月に総合人間学部が設置されて、10年が過ぎた。半年間は教養部との併設であったが、平成5年3月31日に教養部が廃止された。4月に、総合人間学部の第1期生133名を迎えたとき、私はその総合人間学部長に就任することになった。総合人間学部長としての3年間の記憶は、あれから6年以上経ってそろそろ薄れかけてきたが、それらのいくつかを思い出してみることにはしたい。

発足したばかりの総合人間学部の舵取りは苦しいことばかりであった。なかでも一番苦しかったことの一つは、大幅なリストラに直面したことであった。

まず、総合人間学部創設と同時に、教養部教官202名のうち40名が大学院人間・環境学研究科に移籍して、総合人間学部の教官は162名となった。その教官162名のうち34名を既存の各学部に移り替えて移すことになった。学部の専門基礎科目に相当する授業科目を各学部が担当するためである。当時の庶務課長は、この振替定員34について、移籍する予定の教官名を直ちにリストアップするようにという無理な注文を持ってきたが、そんなことはできないとこれを拒絶した一幕があった。

さて、その振替定員34のうち、実際に教官が移籍したのは（いわゆる生首移籍）わずか1名だけで、残りの定員33はすべて生首なしで、空き定員だけを受け取りたいと各学部は主張した。しかし総合人間学部には空き定員は1つもなく、定員にはすべて生首が付いていた。振替定員33を空き定員としてポストだけに移すには、定年や転勤等で空になった教官ポストを、全く補充しないで振り替えていかなければならなかったのである。

ところで、旧教養部は、昭和20年代から少しずつ増えてきた本部からの流用定員20に、工学部からの借用定員6、文学部と医学部からの借用定員各1を



抱えていた。また、臨時増募の教官定員12も総合人間学部は旧教養部から受け継いだ。創設当初の総合人間学部の予算定員は88で、借用8、流用20、臨増12、振替定員34を加えて教官数は162となる。したがって、旧教養部からの借用・流用定員、臨増定員と振替定員を、総合人間学部だけがそっくり背負い込んで、リストラに対応しなければならなかった。

一方、学部創設後の4年間に、年次進行で定員23が純増で配分されることが約束されていたので、完成時の平成8年4月に予算定員は88+23の111となった。

借用定員のうち文学部と医学部に各1を平成5年3月までに返却したが、工学部には返却を少し猶予してもらえたことと、本部からの流用定員20を当分の間総合人間学部固定してもらえたことは誠に有り難い措置であった。平成9年4月までの4年間に、年次進行の純増定員23と定年退官者数から、振替定員34と借用定員6を漸次相殺していく年次定員削減計画を、平成5年6月に総合人間学部が提出し、総長裁定でリストラ計画が確定した。しかし、それに臨増定員12の削減が年次進行で平成6年度から加わってきたので、4年間に160名から28名を削減していくという血の出るようなリストラを実行していくことになった。4年間定年退官教官のポストを全く補充できなかったのも、憲法などいくつかの教科目の担当教官がいなくなるところができるなど、リストラは教官構成にも大きな歪みをもたらした。総合人間学部が、草創期の4年間に、こんなにもリストラで苦労したことを、全学部の皆さんに知ってもらいたいものである。

もう一つ困難であったことは、教養教育の改革実施であった。旧教養部を廃止すると同時に、一般教育科目を全面的に改訂して全学共通科目を実施することになったが、旧教養部を改組して総合人間学部をつくったのだからと、総合人間学部は全学共通科目の実施運営の責任部局であると位置づけられた。

実施運営の責任部局とはいっても、すべての全学共通科目の授業を総合人間学部の教官だけが担当するというのではないのだが、既存の9学部では、旧教養部と同じように総合人間学部が全学共通科目の授業をすべて担当していくものと考えている教官が大部分であった。振替定員などでリストラが重なって行くのだから、これまで通りの全学共通科目を全て総合人間学部が担当できなくなると主張しても、文系学部は、全学共通科目を肩代わりしていこうという意識は、当初ほとんどなかった。他学部教官のそのような誤解を解き、現状認識を変えていくのは並大抵のことではなかった。振替定員を管理するための全10学部長で構成する「企画・調整委員会」では、私はいつも孤立無援であった。工学部長と理学部長から時々助け船を出していただいたことはあったが、ある文系学部が振替定員を受け取ったにもかかわらず、全学共通科目を肩代わりしようという意志が全く見られないので、その学部長に直談判に行ったこともあった。

総合人間学部の教官にとって、全学共通科目を従来通り担当するだけでなく、130余名の総合人間学部生に対する学部独自の新たな授業科目を担当する教育負担が加わったことはいうまでもない。その上に、総合人間学部の教官の約半数は、大学院人間・環境学研究科の協力教官として、大学院の教育と研究指

導も担当していた。また、大学院人間・環境学研究科の教官は、全学共通科目を従来通り担当し、総合人間学部の兼任教官として学部専門科目と卒業研究を担当してもらうことになった。したがって、この大学改革は旧教養部に所属していた教官に大きな教育負担増を強いることになった。

その上に、旧教養部の建物の中に、人間・環境学研究科の大部分の教官と総合人間学部教官とが数年間同居することになった。人間・環境学研究科の建物が平成8年にでき、平成10年に総合人間学部の建物ができるまでは、きわめて狭いスペースでの劣悪な教育・研究環境で我慢せざるをえなかった。

旧教養部を改組して、大学院人間・環境学研究科と総合人間学部ができ、京都大学の歴史に大きな変革をもたらしたが、当時の教職員も学生も、狭い汚いキャンパスで、皆本当によくぞ我慢し、頑張ってきたと思う。

このような激動と苦難の歴史を刻んできた総合人間学部と大学院人間・環境学研究科が発展していくことを、そして京都大学における教養教育が全学の協力体制で健全に維持され充実していくことを、私は心から願っている。

(こじま しんぺい 福井大学長、元総合人間学部長、平成9年退官、専門は有機合成化学)

洛書

巫女の視点と社会学者の視点

大澤 真幸

「村の馬頭観音の像を近所の子供たちがもちだし投げたりころばしたりまたがったりして遊んでいた。それを別当がとがめると、すぐにその晩から別当は病気になった。巫女に聞いてみると、せっかく



観音さまが子供たちと面白く遊んでいるのをお節介したから気に障ったのだというので詫言をしてやっと病気がよくなった。」

私たちが経験していること、それが本当のところ何であるのかを明晰に見たい。これが、社会学者としての私の仕事を導く衝動である。見るということは単純な作業であると思われるかもしれない。だが

見ることは考えることより難しい。引用した『遠野物語拾遺』の中の説話は、見ることの難しさについての比喻になっている。この説話は、経験している世界の本当の姿を見るためには、あえて逆説的な言い方を使えば、見ること自身を遮ること、見ること自身から離れることが必要だということを、教えている。

このことは、別当に世界がどう見えていたかを考えれば、よくわかる。別当には、馬頭観音が、なれなれしく接してはならないもの、距離をおいて崇めるものとして、現れていたはずだ。別当が子供たちを叱るとき、馬頭観音のこのようなあり方は、別当にとってはまぎれもない「真実」である。しかし、それは、誤っていた。つまり、子供たちを叱るときに別当が真実として見ていたものは、別当自身が経験していたはずのものを、裏切っているのである。このことは、別当の身体の兆候によって、示されている。

病という兆候は、実のところ、次のことをいみしている。子供たちと同様に別当自身も、いわば身体の水準では、観音さまも楽しく遊びたいはずだ、観音さまと親しく交わってもよいはずだ、ということを知っていたということ、を。しかし、子供を叱りとばすとき、彼の言葉は、この身体の知を裏切ってしまった。身体的な水準で見ていたものを、言語的な水準で見ることができなかったのである。病は、身体がすでに見ていたはずのものを、言語が否定したことに対する、身体の反作用なのだ。要するに、別当が経験した世界は、複層的に構成されているのである。すぐに言語化される層、つまりさしあたって見えている層が、表層を形成している。しかし、その下に、もう一つ身体的な層がある。ここでは、二つの層は逆接している。この逆接が身体に課す「無理」が、病として現れるわけだ。病は、地表に噴出した深層のマグマである。

経験を見るためには、ある意味で見ることを否定しなくてはならないと言ったのは、経験の深層に到達するために、表層における視点を離れ、もう一つ別の視点に移らなくてはならないからだ。そのもう一つの別の視点は、説話の中では、巫女の視点にあたる。経験の真実を見ようとすることは、巫女の視点を獲得しようとする探究にほかならない。

おもしろいのは、別当が経験している世界の真実に肉薄するのが、別当自身の内的な視点ではなく、巫女という他者の視点だということである。自らが経験する世界が、自ら自身の視点に対して死角になっている。その死角を捉えるのは、特殊な他者の視点である。しかし巫女は、経験を外部から客観的に観察している人のことではない。巫女と別当の関係はもう少し微妙である。別当の身体と、別当自身が自覚している言語的な部分とは、背反している。だから、身体がすでに、別当にとって他者的な部分だ、ということもできる。

実際、これとほぼ同じ構造をもつもう一つの説話では、「遠野のあるお堂の古ぼけた仏像を子供たちが馬にして遊んでいるのを、近所の者が神仏を粗末にすると叱りとばした。するとこの男はその晩から熱を出して病んだ。枕神がたってせっかく子供たちと面白くあそんでいたのに、なまじとがめだてするのを気に食わぬというので、巫女をたのんでこれから気をつけると約束すると病気はよくなった」、とある。最初の説話で巫女が担っていた役割が、枕神と巫女とに二重化している。巫女の視点が、枕神によって担われているのである。言い換えれば、巫女という他者の視点が、外部の他の身体を経由せずに、自ら自身において担われる可能性を、この説話は示唆している。

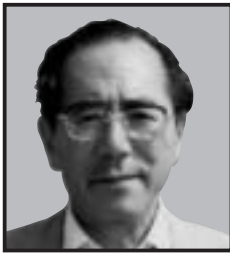
（おおさわ まさち

大学院人間・環境学研究科教授）

訃報

このたび、梅本^{うめもと}堯^{たか}夫^お名誉教授、大井^{おお}龍^{いた}夫^お名誉教授、田中^{たなか}春高^{はるたか}名誉教授が逝去されました。
ここに、謹んで哀悼の意を表します。
以下に各名誉教授の略歴、業績等を紹介します。

梅本 堯夫 名誉教授



梅本堯夫先生は、9月13日逝去された。享年80。

先生は、昭和23年京都大学文学部哲学科を卒業、同大学教育学部講師、助教授を経て同45年教授に就任、教育心理学講座、児童・青年心理学講座の各担当を歴任された。昭和63年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和46年6月から2年間および同52年から2年間評議員として、さらに同51年から1年間教育学部長として、本学の運営に貢献された。

本学退官後は、昭和60年から平成7年まで甲南女子大学文学部教授を務められた。

先生は記憶研究と音楽心理学において優れた研究業績を残され、その分野の発展に寄与されるとともに、広く教育心理学、認知心理学の分野において多大の貢献をされた。主な著書に『音楽心理学』、『認知とパフォーマンス』等がある。

また、日本音楽知覚認知学会および関西心理学会の会長等の要職を歴任された。これら一連の研究教育活動、学会活動により、平成8年4月勲三等旭日中綬章を受けられた。

(大学院教育学研究科)

大井 龍夫 名誉教授



大井龍夫先生は、9月25日逝去された。享年78。

先生は、昭和22年名古屋帝国大学理学部物理学科を卒業、同大学理学部大学院特別研究生前期修了後、名古屋大学理学部助手、助教授を経て、同43年京都大学化学研究所教授に就任、酵素化学研究部門を担当され生体高分子の構造に関する生物物理学的研究に従事された。昭和63年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、化学研究所の大型電子計算機導入に尽力され、同所中央電子計算機室初代室長を務められた。本学退官後は、京都女子大学教授として勤務され、平成5年より3年間、同大学図書館長を務められ、同10年定年退職されるまで大学教育と研究の発展に尽力された。

先生は、生物物理学、特に、タンパク質や核酸等の生体高分子構造の理論的・実験的研究において数

多くの優れた業績を残され、この分野の発展に大きく貢献された。中でも、「大井マップ」として現在でも世界中で広く利用されているタンパク質立体構造の視覚化のための二次元距離マップの開発は、特筆すべき業績の一つである。主な著書に『生命の科学3 タンパク質と酵素』、『新版 生物の情報システム(共著)』等がある。また、先生が監訳された『タンパク質 - 構造・機能・進化 - (シュルツ他著)』は、大学院の教科書などに広く使用され高く評価されている。

先生は、日本生物物理学会の設立に尽力され、昭和53年に京都で開催された国際生物物理学会議の実行委員長として会議を成功に導かれた。また、昭和55年より2年間、学会長を務められ、日本における生物物理学の発展と国際化に尽力されるとともに、数多くの国際シンポジウムを主宰され研究の発展に多大な貢献をされた。

(化学研究所)

田中 春高 名誉教授



田中春高先生は、10月1日逝去された。享年77。

先生は、昭和24年京都大学医学部医学科を卒業、同大学大学院で学ばれた後、ウイルス研究所講師、助教授を経て、同52年教授に就任、ウイルス研究所物理研究部門を担当、その後ウイルス研究所の改組に伴い、がんウイルス研究部門生体発がん研究分野を担当された。平成元年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和63年より1年間ウイルス研究所長として、大学の

管理運営に貢献された。

先生のご専門は、実験病理学で、その中でも免疫電子顕微鏡法を用いたマウス乳癌ウイルスをはじめとする各種レトロウイルスのウイルス粒子形成過程に関する形態学的研究が世界的に広く知られ、またマウス乳癌ウイルスの異所発現による白血病の研究においても優れた業績を残された。

また、日本癌学会並びに日本ウイルス学会の評議員を歴任されるとともに、国際乳癌学会の協議委員として乳癌研究の国際的推進にも努められた。

(ウイルス研究所)

日誌 2002.9.1 ~ 9.30

9月3日 京都大学国際シンポジウム(4日まで)

10日 評議会

13日 同和・人権問題委員会

" 人権問題対策委員会

18日 国際交流委員会

" 国際交流会館委員会

24日 評議会

" インドネシア Mahdi KARTASASMITA
航空宇宙庁(LAPAN)長官他1名来学、
総長他と懇談

25日 博士学位授与式

" 大学入試センター試験実施委員会

話題

木質科学研究所がインドネシアでシンポジウムを開催

木質科学研究所では、日本学術振興会(JSPS/LIPI)拠点大学方式学術交流事業の一貫として、第4回国際木質科学シンポジウムを9月2日、3日の両日、セルポン(ジャカルタ近郊)のLIPI(インドネシア科学院)会議場において開催し、日本からの参加者56名を含む約180名の国内外研究者が参加した。

この事業は平成8年度からアジア諸国、特にインドネシア及びマレーシアとの共同研究並びに研究者交流により学術交流を促進する目的で開始され、今

年度で7年目を迎える。

シンポジウムの始めに、LIPI 物理学研究所アヒアル・オマリー所長が開会の挨拶を述べ、続いて日本側拠点大学の今村祐嗣教授(木質科学研究所)が挨拶を述べた。

その後、3会場でセッションを開催し、熱帯森林資源の持続的な活用のための技術開発研究を受け、各々の視点から21世紀の学術・研究交流を推進させる発表および活発な討論が行われた。

初日のシンポジウム終了後、会場をジャーマンセ

ンターに移してバンケットを行い，本交流事業参加研究者が一堂に会し，久しぶりの出会いがあるなど，話題がつきないなか盛会のうちに終了した。

また，9月4日，5日はエクスカースョンでバリ島のLIPIボタニックガーデンを訪問し，セミナー及び園内見学を行った。

（木質科学研究所）



開会の挨拶をする今村教授

エネルギー科学研究科・エネルギー理工学研究所 「産学連携シンポジウム」を開催

今日，新しい科学技術の創造が強く求められ，大学と産業界との連携・協力が，大学の責務としての社会貢献を進める上でも，また学術研究の進展の上でも，ますます重要なものとなってきた。大学院エネルギー科学研究科並びにエネルギー理工学研究所は，エネルギーと環境に関する先進的で多彩な研究を行っており，これまでに蓄積された知識と技術を産業界の生産活動のシーズとして提供すること，更には，産業界と共同で社会のニーズを吸収・昇華して新しい技術を進展させることを目的とし，9月18日（水）午後1時から，京都テルサ（京都府民総合交流プラザ）で，企業等からの参加を得て，エネルギー科学研究科・エネルギー理工学研究所「産学

連携シンポジウム」を開催した。国際融合創造センターから案内状送付先等の情報をご提供頂くとともに，シンポジウムのホームページを新たに開設して，広く参加を募った。参加募集を始めてから1週間も経たないうちに当初予定していた定員を超える申し込みがあり，改めて産学連携に対する社会の期待の大きさを実感した。当日は，長尾 真総長代理の西本清一総長補佐，森 詳介関西電力株式会社代表取締役副社長，松重和美国国際融合創造センター長の3人の来賓の方々からご講演を頂き，その後，エネルギー科学研究科並びにエネルギー理工学研究所の教官から公募した23件のシーズについてのプレゼンテーションを行った。まず，テーマごとに内容紹介のための4分間の口頭発表を行い，引き続いて，ポスタープレゼンテーションに移った。ポスタープレゼンテーションでは予定していた時間を越えて活発な情報交換が行われた。企業等からの参加者は132名で，経営トップから研究者まで多彩な顔ぶれであった。職種も多岐にわたっていた。次回のシンポジウム開催を希望する声が多く聞かれた。このシンポジウムを契機として，数件のシーズについて企業との共同研究の検討を行っている。

（エネルギー科学研究科・エネルギー理工学研究所）



宇治キャンパス公開2002を開催

9月28日(土)に「第6回宇治キャンパス公開2002」が開催された。

このキャンパス公開は、宇治地区の4研究所、1センター及び宇治地区に研究室を置く研究科等全ての機関が参加して行うもので、各研究所等の研究活動を一覧できる総合展示、公開ラボ、公開講演会を実施した。また、今年度は図書館宇治分館も所蔵資料の展示を行った。

当日は、曇天ではあったが約450名の参加を得た。総合展示では、各研究者から詳細な説明が行われた。公開ラボでは、簡単な低温実験や高分子材料に触れてみる実験等が行われ、科学の一端を体験してもらった。「人類の豊かな未来のために ナノからグローバルへ」をテーマに、「食から見た安定共生

系あれこれ」(農学研究科教授・北畠直文)、「制御って何?」(情報学研究科教授・杉江俊治)、「ナノテクの宝庫・高分子化学」(宇治の市民大学と提携・化学研究所教授・福田 猛)と題して行われた公開講演会では、参加者から多数の質問があり好評のうちに終了した。

前日は14時から学内を対象として総合展示を公開し、夕方には懇親会が行われ約370名が参加した。

今後も引き続き、各研究所・センターが行っている最先端の研究を広く公開し、産学連携の推進を図るとともに、地域に開かれた大学として交流を促進していきたいと考えている。

(宇治キャンパス公開2002実行委員会)

お知らせ

第5回情報学シンポジウム 情報社会の基盤を拓くソフトウェア研究

1. 日 時 12月10日(火) 10:30 ~ 17:00

2. 会 場 京都市国際交流会館(京都市左京区栗田口鳥居町2-1)

3. プログラム

招待講演

安全なソフトウェアシステムの構築技術 - 社会基盤のために

東京大学教授 米澤 明憲

セッション1

人間と共生する情報システムの実現を目指して 教 授 松山 隆司

『正しい』ソフトウェアの構築法 - 型システムとその応用

講 師 五十嵐 淳

音声対話による情報検索

助教授 河原 達也

セッション2

データ蓄積から情報流通へ - 情報フィルタリング・ソフトウェア

助教授 河野 浩之

情報の組織化と自動編集

助教授 佐藤 理史

Webの意味構造発見にもとづく新しいコンテンツ検索サービスに向けて

教 授 田中 克己

4. 定 員 200人(先着順)

5. 入 場 無 料 (申込不要)

6. 問い合わせ先 湯浅・磯本 TEL 753-5974

詳細は、ホームページをご覧ください。

<http://www.i.kyoto-u.ac.jp/>

能楽鑑賞会

課外教養行事の一環として、日本の伝統芸能の能楽鑑賞会を下記のとおり企画しました。本学学生・教職員各位におかれましては、是非この機会に狂言と能楽を堪能してください。

来場をお待ちしております。

記

日 時 12月10日（木）
 午後 6 時00分開場
 6 時30分開演
 （開演後の入場はご遠慮願います。）
 8 時30分終演予定

会 場 京都観世会館
 京都市左京区岡崎円勝寺町 4 4 771 - 6114
 （東山仁王門を東へ約300メートル）

演 目 狂 言「寝昔曲」^{ねおんきょく} 茂山 千之丞
 茂山 あきら 他
 能 楽「鉢 木」^{はちのき} 片山 九郎右衛門
 味方 玄
 副王 茂十郎 他

備考： 入場無料（入場の祭は、学生証または職員証を呈示してください。）

プログラムは当日会場で配布します。

定員は550人、先着順とします。

問い合わせ先：

学生部学生課課外教養担当 TEL 753 - 2511

編集後記

大学の特質は、学生と教員が日常的に接触する中で、学問を極めようとするところにあると思います。

京大に居て有り難いと思うことは、このような学問の場を、縁の下から支えることに、誇りを持って仕事に励んでいただいております、少なからぬ数の事務系や技術系の方々の存在です。国の行政システムの中では、このような方々にたいする位置付けは低く、研究教育のためにと、“前例主義”に抗して仕事をしようとした時、横槍がはいることばあっても、その努力が評価されることは殆どないように思われます。大学の法人化問題でも、これらの方々に、一番のしわ寄せが来そうな気配です。

この京大広報も、担当していただいている職員の苦労の上に成り立っています。しかしながら、一人の編集委員である私の目で見ても、現在の広報の紙面は、人に読んでいただくための工夫に欠けていると言わざるを得ません。これはひとえに、担当の教官委員の怠慢であります。すこし言い訳っぽくなりますが、人に読んでもらえるようなものを、編集をすると言うことは、私のようなその道の素人には大変難しいことです。読みやすい広報を作るためには、支えていただいている事務の方々の奮闘に加え、広報づくりのプロのアイデアが必要です。マスコミ関係に勤めていたような、経験が豊富なプロに、編集に加わっていただくことが出来ないものかと思っている昨今です。

（吉川記）